

[4] 大豆取引

新穀の値下がり損を防ぐ

編集部

「どこまで下がるのだろうか」。7月中旬、雑穀問屋の大豆太郎は罫線（＝相場の動きをグラフ化したもの）を見ながら、頭をかかえていました。

記録的高値から急反落

2003年、需給ひっ迫から大きく上げたシカゴの大豆相場は、年末にいったん下がったものの、2004年に入って暴騰、4月には1ブッシェル10ドル64セントと記録的高値に進みました。「米国の期末（9月末）在庫が異常な低水準になる」と米国農務省（USDA）が予想したのが影響、ファンド資金などが積極的に買ってきたからです。

しかし、その後、「新穀が豊作になる」との見通しが伝わって急落。7月初めには「現物が品薄気味」といわれて少し戻りましたが、再び下げ、底値が見えない展開になっていました。大豆相場は10ドルになることもあれば3ドルになることもあります。下がってきたとはいえ、まだ、例年の相場と比べると価格は高い水準にありました。そこが大豆太郎にとって頭の痛いところでした。

世界の大豆は米国が最大の生産国であり、近年、ブラジルなど南米諸国の生産が増え、激しく追いつけています。逆に、かつては大輸出国だった中国は経済発展で需要が急増、輸入国に転換しています。だが、勢力分野は変わっても、価格の指標は米国のシカゴ商品

取引所の相場に変わりはありません。近年、米国でもNon-GMO大豆（非遺伝子組み換え大豆）の生産は日本など輸入国の要望もあって増えてはきましたが、シカゴの先物市場は相変わらず遺伝子組み換えしている大豆を取引しています。

日本でも同じように遺伝子組み換えをした米国産大豆を先物取引していますが、Non-GMO大豆も先物取引しています。大豆を取り扱う雑穀問屋も両方を取り扱っているところが多いのが実情です。遺伝子組み換え大豆に消費者の拒否反応が強いところから、みそ、しょうゆをはじめ家庭の食卓にそのまま乗る食品はNon-GMO大豆を使っているものが多いからです。

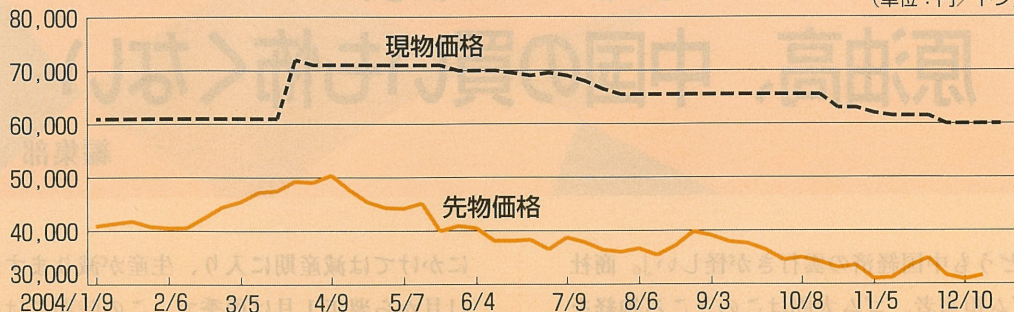
まだまだ下がると見てヘッジ売り

そのNon-GMO大豆は非遺伝子組換えとはいえ、同じ大豆だけに、シカゴ相場に引きずられ、同じような動きをします。もしシカゴ相場が下がり続ければ、Non-GMO大豆の日本での現物価格も下がるのは間違いありません。4月に1トン5万円していた12月限（12月決済物）の先物価格は最近では3万8,000円前後まで落ち込んでいます。

つれて現物価格も下げ歩調にあります。「それでもまだまだ下がる」と読んだ大豆太郎はヘッジ売りを敢行することにし、10枚（1枚は10トン）の売り注文を出しました。価格は

Non-GMO大豆相場の推移

(単位：円/トン)



(注) 先物価格は東京穀物商品取引所2004年12月限、現物価格は問屋卸選別物、いずれも週末値

1トン当たり3万8,000円。ピーク時よりかなり下がっていますが、それでも例年と比べると高い水準です。

このころ、Non-GMO大豆の現物価格は1トン6万8,000円前後でした。現物価格は選別した大豆に付くので、どうしても選別していない大豆に付く先物価格に比べると高くなります。ところが9月に入ると、先物価格も一転、高くなり、1トン4万円に接近してきました。シカゴ相場が早霜懸念で「収穫が減るかもしれない」として、上昇したのが響いたものでした。当時、現物価格は下がり続け6万5,500円になっていました。そこで、ヘッジどころか先物価格で損を出し、現物価格でも値下がり波をまともに食らっていました。

だが、大豆太郎はびくともしません。長い間の商売で、時にはこのようなことは起こっても、先物取引を決済するまでには現物価格、先物価格とも同じような動きになることが多いことを知っていたからです。

9月後半、国内のNon-GMO大豆の12月限相場はジワジワ下がり始めました。10月初めには3万5,000円を割り込み、11月には3万1,000円台にまで落ち込みました。現物価格も6万1,000円まで下がっています。先

物価格は7,000円下がったものの現物価格は4,500円の下げです。

「もうちょっと待ってみるか」。大豆太郎がそう考えたとき、先物価格は再び上がり始め、3万4,000円台になりました。大豆太郎はさらに現物が売れる時期まで先物で売った分の買い戻しを待つことにしました。12月中旬、大豆太郎は売った分を買い戻しました。価格はまた下がり、3万1,000円になっていました。1トン7,000円、10枚(100トン)では70万円の利益です。

下げ率は先物価格のほうが大

中一方、現物は6万円、こちらは8,000円下がっていました。表面的には先物価格の下げのほうが1,000円少なかったのですが、現物は選別しており、価格が高いので、下げ率では先物価格のほうがはるかに大きく、十分ヘッジの役割を果たしました。いわば、先物取引で販売価格を採算に乗るに近い価格に固定できたのです。「異常気象は常態化した。これからの経営安定には、先物取引でのヘッジはますます欠かせないようになるかもしれない」。大豆太郎はほっと安どの息をもらいました。